

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

The Current Situation of Lolo Dialects Spoken in Yunnan

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-04-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岩佐, 一枝 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00001909

中国雲南省における彝語方言の使用状況

岩佐 一枝

- | | |
|--------------------|--------------------|
| 1 はじめに | その要因 |
| 2 各彝語方言の使用状況 | 3.1 濫泥菁阿細彝語 |
| 2.1 阿細彝語 | 3.2 石林撒尼彝語 |
| 2.2 撒尼彝語 | 3.3 麻地阿扎彝語 |
| 2.3 阿扎彝語 | 4 今後の彝語方言の使用状況について |
| 3 各彝語方言にみる使用状況の差異と | |

1 はじめに

彝語（別名ロロ語）は、シナ・チベット語族チベット・ビルマ語派のロロ・ビルマ語支に属し、その中でも、ラフ語、ハニ語、リス語等と共にロロ語群を形成する。そして、中国国内における彝語は、6方言25下位方言¹⁾に分けられている。本発表では、この彝語6方言のうち、特に東南部方言²⁾の三つの下位方言の使用状況について述べる。これら三つの下位方言とは、阿細彝語、撒尼彝語、阿扎彝語である。

この3下位方言は、いずれも1997年から98年にかけて、発表者自身がフィールドワークを行ったものである³⁾。

阿細彝語は、東南部方言の弥勒下位方言のことである⁴⁾。本発表では、雲南省弥勒県濫泥菁村で話されている阿細彝語の下位方言の一つについて述べる。以下、他の阿細下位方言と特に区別する必要がある場合には、この阿細彝語をその地名から、濫泥菁阿細彝語と呼ぶ。この濫泥菁阿細彝語の使用状況は、発表者が1997年10月から11月にかけて現地調査を行った際の考察に基づいている。

撒尼彝語とは、東南部方言宜良下位方言のことである。撒尼彝語は、撒尼文字と呼ばれる文字と、それによって書かれた文献を持つ。本発表では、雲南省石林彝族自治县（以前は路南彝族自治县の一部であった⁵⁾）石林五棵樹村で話されている撒尼彝語の使用状況について述べる。なお、発表者の滞在は、1997年9月、1997年11月から1998年2月、同年の7月から8月、および10月の期間であり、本発表の記述は、その当時の考察に基づくものである。以下、濫泥菁阿細彝語と同様、特にこの地の撒尼彝語を指し示す必要がある場合には、石林撒尼彝語と呼ぶ。

阿扎彝語とは、東南部方言文西下位方言のことである。本発表では、この阿扎彝語の

うち、雲南省文山壮族苗族自治州文山县東山郷麻地村の言語使用状況を提示する。馬塘幕非村の言語使用状況についても、若干ではあるが言及する。これは、発表者が1998年の9月から10月にかけて文山に滞在した際の考察に基づいている。以下、必要に応じて、麻地村で話されている阿扎彝語を麻地阿扎彝語、幕非村で話されているものは幕非阿扎彝語と呼ぶ。

2 各彝語方言の使用状況

2.1 阿細彝語

阿細彝語は、主に雲南省の弥勒県一帯で話されている。阿細族は、人口約28,000人と
言われ⁶⁾、弥勒県の西山地区にその多くが居住しているが、路南彝族自治県の一部等、
周辺他県との県境地域に住む阿細族もいる。

発表者は、弥勒県西一郷濫泥菁村の西山民族中学校に、1997年10月から11月の間滞在し、阿細彝語の言語調査を行った。この地においては、住民のほとんどが阿細族で、また、漢族が極めて少数であるということもあり、阿細族は幼児から老人に至るまで、日常的に専ら阿細彝語を用いていた。このように、この地の阿細族にとっては、阿細彝語が主要言語であったので、就学前の児童や年配者においては、阿細彝語は支障なく話せるが、逆に漢語（標準語である普通話をもとより、雲南方言でさえも）がうまく話せないという者が珍しくなかった。しかも、この傾向は、20代、30代の若い世代の中にも見受けられた。これは、後述する撒尼彝語、阿扎彝語の言語使用状況と大きく異なる。

濫泥菁村における阿細彝語、及び漢語の使用状況は以下の通りである。

- ・阿細彝語は問題なく操ることが出来る。漢語のうち、普通話は聞き取れてもほとんど話せないが、漢語雲南方言はよく理解し、話すことも出来る。
- ・専ら阿細彝語を用いて生活しており、漢語雲南方言は聞き取れてもあまり話せない。中には、普通話を聞き取ることが出来ない者もいた。
- ・小学生、中学生のうち、そのほとんどは阿細族の生徒であった。彼らは、日常的に阿細彝語を使用していた。漢語も、雲南方言は問題無く話すことが出来た。
- ・中学校には、若干ではあるが阿細族の教師もいた。彼らのほとんどは濫泥菁村出身ではなく、近隣の阿細族の村の出身者であったが、阿細族の学生たちとは、互いに阿細彝語で支障なく会話していた。学生たちの多くもまた濫泥菁村以外からの寄宿生であったということらを考慮すると、濫泥菁村近辺の阿細族の各村々で話されている阿細彝語は、相互の意思疎通を妨げるほどの大きな差異はないものと考えられる。実際、この中学校のある教師は、彼の村の阿細彝語と濫泥菁阿細彝語は、「声調が多少違う

程度で、意思の疎通にはほとんど問題無い。」と話していた。

- ・漢族の生徒の中にも、若干ではあったが、阿細彝語を話せる者がいた。

以上のように、阿細彝語は、濫泥菁村で日常的に最もよく用いられている言語であり、この地の第一言語と言って差し支えないだろう。この点で、濫泥菁村における阿細彝語の使用状況は、石林の撒尼彝語等と大きく様相を異にしている。

2.2 撒尼彝語

撒尼彝語は、雲南省宜良県、路南彝族自治州、並びに1999年に路南彝族自治州から独立して自治県となった石林彝族自治州一帯で話されている。中心地は圭山 (GuiShan)。石林彝族自治州が独立する以前の路南彝族自治県の資料によると、路南県内の撒尼族の人口は60,732人で、県内の総人口の30.85%を占めている⁷⁾。

石林彝族自治州五保樹村では、先に述べた濫泥菁村とは対照的に、ほとんどのものが漢語(雲南方言)をよく解した。とりわけ若年層では、個人差はあるものの、撒尼彝語だけでは——つまり、漢語(雲南方言)なしでは——すでに意思の疎通が十分にはかれない者が多く、撒尼族でありながら、撒尼彝語が全く話せないという者も少なくなかった。

ただ、石林においても濫泥菁村のように、漢族でも撒尼彝語を話す者が観察された。しかしながら、それは石林が観光地であるということに起因しており、上述の濫泥菁の場合とは大きく異なっている。石林は、中国国内でも有数の観光名所であり、撒尼族、漢族問わず、多くの者が観光関連産業に従事している。そして、漢族の中には、撒尼族の民族衣装に身を包み、旅行ガイドをしている者も少なくないのである。このような漢族のガイドが、旅行客に問われて、簡単な撒尼彝語を話してみせるような事象も日常的に見受けられた。しかしながら、漢族で撒尼彝語を話せるという者は、このような場合を除いては、極めて珍しいことだと言える。

また、撒尼彝語は、阿細彝語に比べ、政治・文化に関連した語彙だけでなく、日常的に用いられる語彙についても、かなり大量の漢語を借用している。よって、撒尼彝語における漢語借用の程度は、阿細彝語とは比較にならないほど大きく、漢語の語彙が単に借用されるのはもちろん、形態統語論的变化を起こした例まで見受けられた。その例として、漢語雲南方言の語彙 [tci⁵³t⁴⁴] (「簡単」; 簡単である) の借用が挙げられる。この語は、石林撒尼彝語では [tca⁵⁵t³³] と発音されるが、問題はこの語彙の否定形である。撒尼彝語では、形容詞が2音節である場合、その二つの音節の間に否定辞である [me²¹] を挿入し、否定形を作る。これが、借用語であるこの [tca⁵⁵t³³] にも適用され、[tca⁵⁵me²¹t³³] (簡単ではない) となるのである。

2.3 阿扎彝語

阿扎彝語は、雲南省文山壮族苗族自治州文山県一帯で話されている。阿扎族の人口は14,268人、県全体の人口の約4.28%を占める⁸⁾。このことから明らかなように、文山において、阿扎族は極めて少数派である。この件と関連してか、文山の政治・社会面では、人口面で圧倒的多数を占める壮族、苗族が有力であり、少数派である阿扎族の社会的、政治的地位は非常に低い⁹⁾。

発表者は、東山郷の麻地村、馬塘の幕非村の出身者各々1名ずつをインフォーマントとして阿扎彝語の言語調査を行った。東山郷には15の村落、612戸、3,403人；馬塘には11の村落、607戸、3,304人が居住しているという¹⁰⁾。このうち、発表者が実際に訪ねることができたのは、東山郷麻地村、及び東山郷政府の所在地周辺一帯である。

発表者は、これらの村落に滞在して言語調査を行いたいと考えていたが、それは叶わなかった。その理由の一つに、阿扎族の居住地が、阿細族、撒尼族の居住地に比べて非常に不便で、隔絶された場所に位置していたことが挙げられる。しかし、外国人である発表者が1人で阿扎族の村落に滞在することを、東山郷政府の幹部陣が許可しなかったというのが最大の理由である¹¹⁾。

発表者の訪れた麻地村は、山間の非常に小さな集落で、戸数は10戸足らず、住民の多くは60代以上と高齢であった。壮年、若年層は、みな文山の街中等に出てしまい、過疎化がかなり進んでいた。集落では、ほとんど漢語は用いられず、麻地阿扎彝語で意思の疎通を図っていた。

発表者の言語調査対象であったこの麻地村出身のインフォーマントは、60代の男性で、退職した元幹部であった。彼の麻地阿扎彝語の運用能力は非常に優れており、意志伝達に関しては、麻地阿扎彝語のみでも何ら支障を感じていない様子であった。彼自身の言によれば、「漢語を全く使わず、阿扎彝語の語彙だけで『毛沢東語録』を説明したり、翻訳したりすることも出来るだろう。」ということであった。しかしながら、このインフォーマントの姪であり、同じ麻地村出身でもある40代の女性（文山県政府幹部）になると、すでに漢語からの借用語を用いることなしで、阿扎彝語を話すことは不可能であった。ただし、彼女は決して例外的な存在ではなく、阿扎族の40代以下の年代では、もはや阿扎彝語のみで、自分の意思を完璧に伝えることのできない者が少なくないのが実情である。この傾向は、もう1人のインフォーマントである馬塘幕非村出身の30代の医師にも見受けられた。麻地阿扎彝語と幕非阿扎彝語の方言差を考慮に入れても、彼の話す阿扎彝語に漢語からの借用語が、より大量に流入していることは明らかであった。麻地村等の集落では、阿扎彝語は問題無く話せても、漢語に至っては雲南方言すらほとんど分からない、といった年配者が珍しくなかったのに対し¹²⁾、40代以下の層では、両阿扎彝語方言とも、状況が全く逆転してしまっている。

阿扎族には、かつては歌垣の風習があり、非常に優れた歌も数々作られたとのことであるが、最近では廃れてしまっているという。若い者が村を出てしまい、歌垣に参加する者自体が減ったということもあろうが、何よりも、若い世代が阿扎彝語を使えなくなってきたということが最大の原因であろう。

3 各彝語方言にみる使用状況の差異とその要因

2. で述べたように、阿細彝語、撒尼彝語、阿扎彝語の使用状況はそれぞれ異なっている。では、各方言の使用状況の差異は、一体何に起因するものなのか？

それぞれ三つの方言を比較すると、都市部と最も接触が多いのは、地理的にも、社会的にも、石林撒尼彝語であろう。石林は、雲南省の省都である昆明に近いだけではなく、中国国内でも有数の観光地である。そのため、中国国内外から、多くの観光客が日々この地を訪れる。よって、濫泥菁阿細彝語や、麻地阿扎彝語、幕非阿扎彝語に比べて、外部との接触（外国との接触も含む）は極めて多い。

これに対し、濫泥菁阿細彝語、麻地阿扎彝語が話されている村落は、いずれも大変不便な場所に位置しており、都市部との接触は極端に少ない。特に、麻地阿扎彝語の話されている麻地村周辺は、隣村まで山を幾つか越えなければならないほどで、一つ一つの集落が、各々孤立した状態で分布している。麻地村を管轄している東山郷政府は、文山の中心街から車で30分程であるが、ここから麻地村へは、山を幾つも越えなければならない。その間、険しく、細い山道が続いた。隣村へは、悪路のため、ジープでは進めず、歩いて行かざるを得なかった。

濫泥菁も、麻地村程ではないにしても、かなり不便なところにある。まず、弥勒県の中心街である弥勒からバスで約2、3時間、山を幾つも越え、西一郷政府のある西一郷という場所に到着する。そこから濫泥菁までは、バスなどの交通手段が無いので、山道を片道約3キロ程歩かなければならない。

以上の3方言を、外部との接触、地理的条件から考察すると、以下ようになる。

麻地阿扎彝語：	外部接触 —— 最も少ない
	地理的条件 —— 最も不便で辺鄙
濫泥菁阿細彝語：	外部接触 —— 少ない
	地理的条件 —— 不便で辺鄙
石林撒尼彝語：	外部接触 —— 最も多い
	地理的条件 —— 最も都市部に近く、交通の便も良い

この3方言のうち、集落が最も辺鄙な場所にあり、外部接触も最も少ない麻地村では、民族言語が最も良く保持されているに違いない、というのが発表者の当初の予想だった。ところが、その予想に反して、民族言語が老年層から若年層まで平均的に、しかも最もよく保持されていたのは濫泥菁阿細彝語であった。麻地阿扎彝語、石林撒尼彝語、そして幕非阿扎彝語も、若年層では使用の程度、並びに頻度はかなり低下していた。

この事実から、民族言語の衰退は、単に「民族言語が話されている地域の地理的・社会的孤立の度合い」に比例するものではないと言えよう。たとえ都市部や、外部（漢族だけでなく、周辺少数民族も含む。）との接触が困難な土地であっても、そのような地で必ずしも民族言語が良く保持されているとは限らない。そこで、発表者は、各彝語方言を取り巻く環境に、幾つかその要因となっているものがあるのではないかと考えた。それらは、以下の五つである。

- 教育環境
- 地域的要因
- 社会的要因
- 民族意識の変化
- 婚姻形態の変化

発表者は、これら五つの要因のうち、特に「教育環境」が、民族言語保持において重要な役割を果たしていると認識している。

以下、これらの要因が、濫泥菁、石林、麻地の民族言語の使用状況に、どのような形で影響しているのか、考察していく。

3.1 濫泥菁阿細彝語

1) 教育環境

濫泥菁は、フランス人宣教師の布教活動を契機に、19世紀末頃から周辺地域一帯の文化・教育の中心的な場所であった¹³⁾。

発表者の滞在した濫泥菁村の西山民族中学では、漢族も阿細族も、また他の少数民族の者も、学生の大半が寄宿生活を送っていた¹⁴⁾。10日程連続して授業が行なわれ、2週間に1回、4日間程度の休みが設けられていた。よって、学生たちは、中学を卒業するまでの期間、ほとんど家族と離れ、学校で友人たちと共に過ごすことになる。一見、このように家族と離れて生活をするということは、民族言語の喪失を促進させるように思える。実際、麻地阿扎彝語の場合は、就学年齢に達した児童が寄宿生活を送らざるを得

ないことが、民族言語の喪失に拍車をかけていた¹⁵⁾。ところが、濫泥菁一帯は阿細族が非常に多い地域であったことから、寄宿生活が逆に、民族言語を保持させる方向に作用していたのである。西山民族中学には、阿細族以外の民族の学生もいたとはいえ、大多数は阿細族で、寄宿生活の中でも阿細族の学生は当然、頻繁に自分たちの「共通言語」である阿細彝語を用いていたのである。さらに、濫泥菁村自体、阿細族の村なので、購買での買い物や、給食を受け取る時等、阿細族の学生は阿細彝語で事足りる。このような環境の下、阿細族の学生が漢語（雲南方言）ではなく、阿細彝語を使う傾向はますます強まったと考えられる。そのため、2.1. で述べたように、漢族の学生の中には、友人の話す阿細彝語を解する者までいたほどである。これは、他の二つの彝語方言と比べて、かなり珍しいことである。

2) 地域的な要因

漢族は、かなり最近になってこの地に定住するようになったということである。しかもその戸数は、現在でもなお2、3戸程度に止まっているという。よって、歴史的に見て、濫泥菁に住む阿細族は、漢族との接触が比較的少なかったと考えられる。なお、濫泥菁に定住している漢族以外で、この地に滞在していた漢族は、そのほとんどが西山民族中学の教師と学生たちであった。

3.2 石林撒尼彝語

1) 地域的・社会的要因

石林は中国国内でも有数の観光地であり、この地に居住している撒尼族は、雲南省内でも、政治的に特に優遇されているようである¹⁶⁾。その影響からか、石林に撒尼族だけでなく、中国に居住する彝族全部族のための博物館を作る計画も進行していた。このように石林や路南では、政府レベルでの民族文化の保存作業が進められており、例えば、路南県民族委員会などは、撒尼彝語文献の保存にも大変力を注いでいた¹⁷⁾。

上述のように、路南や石林の政府は撒尼族の民族文化の保存・伝承に力を入れていたが、その反面、漢語化は逆に進行していた。観光地という土地柄、日々多くの観光客が訪れるため、撒尼族の多くは流暢な普通話話すことが出来る。というよりもむしろ、普通話が出来なければ、商売にならないというのが実情であった¹⁸⁾。そのため、撒尼族の多くは漢語雲南方言以外に、個人差はあれども、普通話を話せるものが多かった。2.2. で述べたように、石林撒尼彝語は漢語から大きな影響を受けているが、これは、石林の地域的・社会的背景に負う部分が大きいと考えられる。

また、観光地である石林には、雲南省内だけではなく、四川、貴州などの中国西南部からも、漢族、苗族など多くの人々が、出稼ぎや商売目的でやって来て、移り住んでい

た¹⁹⁾。そのため、撒尼族と彼らの間では、日常的に漢語が共通言語として用いられていた。ただ、出稼ぎ労働者のほとんどは、中国西南部出身者であり、西南官話が問題無く通じることから、互いに地元の方言を使う場合が多かった。例えば、四川出身の者は四川方言、石林の撒尼族は雲南方言で会話をすると、いう具合であった。

このように、撒尼族が日常使う漢語は、ほとんどの場合において雲南方言であったが、多くの人が普通話も話すことが出来た。この点は、濫泥菁の阿細族と異なっている。阿細族の場合は、普通話が話せたとしても、雲南方言のアクセントが強いという者が多かったが、石林の撒尼族では、そのような者は比較的少なかった。このことから、石林の撒尼族が、濫泥菁の阿細族と比べて、漢語の影響をより強く受けていることが窺える。

2) 婚姻形態の変化

1) で述べたように、石林では、撒尼族と多くの漢族が共存していることから、近年、撒尼族と漢族の結婚が非常に増えてきている²⁰⁾。しかし、漢族で撒尼彝語を話せる者や、まして習得しようという者はほとんどいないため、結婚後、家庭内で使用される言語は必然的に漢語に限定される。その結果、撒尼族と漢族の両親を持つ子供で、撒尼彝語を話せないという者が増加している。

3) 民族意識の変化

両親共に撒尼族でありながら、しかも石林で育っているながら、撒尼彝語が話せないという若者も少なくない。これは、彼らの民族言語に対する意識が変化しているからではないだろうか。そして、それは元を辿れば、若者の民族意識に何がしかの変化が生じているからではないだろうか。具体的にその変化、及び変化の原因となっているものを明言することは困難であるが、敢えて言うならば、おそらく一種の「ファッション」のようなものであろうと発表者は考える。例えば、撒尼族の若者の多くは、自分が流暢な普通話を話せないということは恥ずかしがるのだが、民族言語を話せないことについてはさほど恥ずかしがらない、といった傾向が見られた。

3.3 麻地阿扎彝語

1) 教育環境・地域的要因・社会的要因

東山郷一帯の集落の子供達は、中学校に上がる年になると、村を出て、東山郷政府付近の中学校へ通う。そして、そこまで通うことの出来ないものは寄宿することになる²¹⁾。この場合、濫泥菁のように、共に寄宿生活を送る学生の多くが、同じ阿扎族であれば、阿扎彝語はよく保持されるのかもしれないが、東山郷では阿扎族は少数派で、苗

族、壮族、特に苗族の占める割合が多い。そこで、学生が互いに意思の疎通を図ろうとすれば、漢語を用いる他ないだろう。また、中学校の授業は、当然漢語でなされる。その結果、阿扎族の学生が日常的に使用する言語は、その大部分をおそらく漢語が占めることになる。

阿扎族は、先述のように、文山においては非常に少数派で、政治的にもほとんど力を持っていない。この阿扎族の社会的・政治的地位の低さは、自他共に認めるものである。それ故、故意に阿扎彝語を使いたがらないような者や、自分が阿扎族だということを知られるのを嫌がる者までいた。こういった状況であったので、阿扎族は、これまで自分達の言語や文化というものに対し、ほとんど価値を認めておらず、自分たちの言語文化の保存・伝承の重要性についても、全くと言っていいほど無頓着であった。

2) 婚姻形態の変化

石林の撒尼族同様、40代以下では漢族等、他の民族と結婚する者が急激に増えている。その結果、撒尼族の場合と同じように、その子供の多くは、阿扎彝語を全く話せない。

4 今後の彝語方言の使用状況について

これまで述べてきたように、濫泥菁阿細彝語、石林撒尼彝語、並びに麻地阿扎彝語の使用状況は、教育環境、地域的要因、また、社会環境やそれに伴う婚姻形態の変化等により、各地で異なった様相を見せる。中でも、教育環境は、民族言語の使用に対して、これまで以上に大きな影響を与えていくと推測される。教育の場では、基本的に漢語が用いられ、辺鄙な所に住んでいる子供ほど、通える範囲に学校がないために、早くから親元を離れ、寄宿生活を送らなければならないという事実もある。このような状況では、民族言語に触れる機会が、早い時期から極端に失われてしまうことになりかねない。

更に、こうして学校を卒業しても、現金収入につながるような産業、商業に乏しい故郷の村には戻らず、そのまま街で働く者もますます増えるに違いない。そしてその際、漢語が出来なければ、まず仕事は無い。そのため、濫泥菁の中学生は、熱心に普通話を学んでいた。それどころか、自分達が標準的な普通話を話せないということを恥じる学生が非常に多かった²²⁾。また、石林や文山では、自分達が自分自身の民族言語を話せないということに、何の疑問も、後悔も、恥ずかしさも感じない若者が増えていた。漢語は、社会生活における必要性からだけではなく、その文化的優位性と若年層の民族意識の変化といったさまざまな理由と相俟って、彼等にとって確実に主要な、しかも唯一の

言語になりつつある。そこで、民族言語の保持にとって、大きな役割を果たすに違いない教育の場において、民族言語がいかに扱われるべきなのかを考えなければ、ますます民族言語を話せない若者が増えていくに違いない。40代程度でも、完璧に民族言語を操ることができる者は、すでに少なくなっている。それ故、このままいけば、こういった言語はますますスピードを上げて、消滅へと向かうに相違ない。本発表で言及した三つの彝語方言のうち、若年層において、最もよく保持されていた濫泥菁阿細彝語も例外ではない。西山民族中学は、発表者の滞在中すでに、弥勒県の中心街である弥勒への2、3年後の移転が決定していた。そうなれば、おそらく、学生全体数に占める阿細族の割合も変化するはずであるし、変化せざるを得ないであろう。

また、阿扎彝語のように、その言語が失われると共に、歌垣等の民族の文化や風習まで失われて行くのは、非常に残念なことである。

注

- 1) 6方言とは以下の通りである。
北部, 東部, 南部, 西部, 中部, および東南部方言の六つ。詳細については, 陳ほか (1985) を参照されたい。
- 2) 東南部方言には, 宜良, 弥勒, 文西下位方言の他に, 華弥 (阿哲彝語) 下位方言がある。
- 3) 発表者は, 撒尼彝語が使用されている雲南省路南県石林 (現:石林彝族自治县) に滞在していたが, これは, 撒尼彝語のフィールドワークを主要な目的にしていたというよりも, 阿細彝語や阿扎彝語の調査拠点としての意味合いの方が強かった。しかしながら, 撒尼彝語に関しては, 他の2方言に比べ, 滞在がかなり長期にわたっていたということもあり, 日常のより細かな言語使用状況について言及出来ると考える。
- 4) Bradley (1979) では, チベット・ビルマ語派ビルマ・ロロ語支ロロ語群のうちの Central Loloish に属し, 撒尼彝語, ハニ語等と共に Loloid を形成すると定義されている。
- 5) 注3参照。
- 6) 何 (1988) p.1参照。
- 7) 『路南彝族自治县志』 p.120による。なお, 発行年は, 発表者が資料の抜粋のみを譲り受けたために不明。
- 8) 『文山県文史資料第二集』 (1990) p.78。
- 9) 撒尼族が, 路南彝族自治县, 石林彝族自治县内外で社会的・政治的に極めて有力であるのとは大きく異なる。路南・石林地域で, 撒尼族の総人口に占める割合は30%以上と大きいのが, 政治・社会面での勢力は両地域内にとどまらず, 雲南省省レベルにまで及ぶ。このことから, 文山における阿扎族の社会的・政治的地位の低さは, 単にその低い人口比率のみに原因を求めることはできないかもしれない。
- 10) 注8参照。
- 11) 東山郷政府, 及び文山県政府の役人たちによれば, 阿扎族は外部との接触が少なく, 特に外国人との接触は皆無に等しいとのことであった。また, 漢語 (普通話, 並びに雲南方言) が話せないものも多く, その生活条件も未だ電気が通っていないなど, まだまだ厳しい。以上

のような諸事情を考慮し、郷政府は、発表者の村落への滞在を「身柄の安全を十分に確保出来ない。」との理由から、許可しなかった。後に、東山郷政府敷地内にある小学校に滞在して、麻地村へ通うという妥協案が提出されたが、麻地村は郷政府からでさえ、毎日通うには余りに困難な場所であったため、最終的に、文山県政府（文山中心部）近辺でインフォーマントを探すとこととなった。

- 12) 注11参照。
- 13) 発表者が訪れた当時も、村には古い教会があった。半ば壊れかけてはいたが、村人たちの憩いの場となっていた。村人の中にはカトリック信者があり、インフォーマントの一人も敬虔な信者であった。
- 14) 彼らはみな周辺の村落の出身であったが、こういった村落は周辺とは言え、かなり遠い村もあり、その多くは、交通手段も徒歩以外に無いような辺鄙な所にあった。そのため、多くの学生にとっては、自宅から中学校まで毎日通うことは不可能であった。中には、中学校から自宅まで片道、山道を徒歩で10時間以上もかかるという学生もいた。そこで、西山民族中学は、寄宿制を採らざるを得なかったのである。また、教師たちの中でも家が遠くて通えない者は、校内の寮に住んでいた。
- 15) 3.3. 参照。
- 16) その理由の一つとして、発表者が滞在していた当時の雲南省省長が、撒尼族出身者であったことが挙げられよう。
- 17) 例えば、撒尼彝語の文献を扱うことが出来るのは、ピモと呼ばれる巫師であるが、路南県民族委員会ではこういったピモを召集して、文献を書き留めさせたり、漢語への翻訳作業などを進めていた。しかし、ピモ以外の撒尼族のほとんどは、撒尼文字の読み書きは全く出来ない。
- 18) 英語を話す者や、日本人観光客も多いことから、日本語の出来る者もいる。
- 19) 石林に移り住んだ四川の彝族が、家内制手工業で刺繍製品を作り、撒尼族の土産物屋に卸すという事象も見受られた。
- 20) 2、30年前までは、少数民族と漢族の結婚自体、非常にまれであったという。よって、撒尼族と漢族の結婚が増えて来たのは、ここ最近の動向であろう。
- 21) 通常、就学年齢に達した児童は、小学校までは家の近くにある小学校に進む。しかし、発表者は、麻地村近辺には、通学可能圏内に小学校はなかったように記憶している。仮にそうであるとすると、麻地村の子供たちは、おそらく小学校入学を期に、寄宿生活を送ることになると思われる。そうになると、子供たちは非常に幼い段階で、親元を離れなければならない。
- 22) 雲南方言が話せても、標準的な普通話話せないとすることを極端に恥ずかしがるという傾向があった。普通話話せるといことは、彼らにとって、より良い職につくためには、必要不可欠なことであるに違いない。

文 献

Bradley, David
1979 *Proto-Loloish*. Curzon Press.

陳士林

1985 『彝語簡志』 民族出版社。

何德宗

1988 『阿細文語法』 (孔版)。

李紹明ほか

1993 『民族知識叢書 彝族』 民族出版社。

Yang Shijie

1995 『多元文化中的情韻』 雲南教育出版社。

政協文山県文史資料委員会

1990 『文山県文史資料第二集 鍾秀文山』 中国人民政治協商会議雲南省文山県委員会編印。